

眠た奴ら

大沢在昌





眠たい奴ら

大沢在昌

大沢在昌（おおさわ・ありまさ）

1956年、名古屋生まれ。慶応大学中退。

79年、『感傷の街角』で第1回小説推理新人賞を受賞。

その後、86年に『深夜曲馬団』で日本冒険小説大賞最

優秀短編賞を、91年に『新宿鮫』で第12回吉川英治文

学新人賞と第44回日本推理作家協会賞長編部門を、94

年に『新宿鮫 無間人形』で第110回直木賞を受賞。

近著には『天使の牙』『炎蛹 新宿鮫V』『雪蛭』など

がある。

ねむ やつ
眠たい奴ら

1996年10月20日 印刷

1996年11月5日 発行

著 者 大沢在昌
編集人 光田 烈
発行人 田中正延
発行所 毎日新聞社

〒100-51 東京都千代田区一ツ橋

〒530-51 大阪市北区梅田

〒802 北九州市小倉北区紺屋町

〒450-51 名古屋市中村区名駅

印刷 凸版印刷

製本 大口製本

落丁・乱丁本はお取り替え致します

© Arimasa Osawa Printed in Japan 1996

ISBN4-620-10553-8

眠
たい
奴
ら

装帧
河野治彦

1

そのマンションの部屋を選んだのには、理由がいくつかあった。まずひとつめは、部屋が三階にあつて、裏手が大きな寺の境内に面していること。境内には「保護樹木」の指定をうけた樹齢二百年を越える銀杏の木が植わっている。その張りだした枝が、ちょうど二LDKの六畳間の窓のま下にあつて、いざとなればとび移ることが可能そうに見えたからだ。ふたつめは、部屋のオーナーは、税金上の理由でこの部屋をまた貸しにしている、そのせいで借り主の名前や素姓を一切せんきくしないことだ。あいだに入っているのは、兜町のお金貸しで、しばらく愛人にしていた銀座のホステスを住まわせていたのだが、仲が終わって空き部屋になった。女房をひどく恐がる男だから、女と切れたあとも、管理を任されている部屋の存在を秘密にしている。

みつつめは、ごくありきたりだが、防犯カメラ付のオートロック機構を備えていることだった。

高見良一がそのみつつの理由でこの部屋に住むようになってひと月半がたつ。そろそろ『本部』の結論がでそうで、しかもその内容についても見当がついていた。もしついでいなければ、東京とはさっさとおさらばしていただろう。

だがいずれにしても用心に越したことはない。それまで住んでいた南麻布のマンションを夜逃げ同然にでてきた、あの八月のむし暑い晩まで、じつくりと時間をかけてこの部屋を捜したのだ。いっしょに住んでいた、二十一歳の六本木で働くホステスは、その十日前に、ハワイにいくと告げて荷物をもってでていつていた。アダルトビデオの女優になったという噂もあったが、高見はその仕事も長つづきするとは思っていなかった。

とにかく湯水のように金をつかうのが好きな娘だった。車だろりと洋服だろうと、人がうらやむようなものを手に入れてやらなければ、すぐにヘソを曲げるのだ。七月の終わりに、買って三ヵ月足らずのフェラーリを沈めたときから、こうなることは見え

ていた。「別れの予感」と呼ぶには現実的すぎる展開だが。

ビデオ女優が思ったほどは金にならないと気づけば、すぐにでも新しい男をつかまえるだろう。

腐るほどのあぶく銭をもった男の匂いを、敏感に嗅ぎわけることのできる娘だ。

どちらにせよ潮時だった。二十一歳という若さで、SMから何からすべてひと渡しし尽した娘の飽くなき欲求に応えるには、半年間の同棲は長すぎる。「朝・昼・晩、いつでも、どこでも」が、あの娘のキャッチフレーズだった。いつでも、どこでも、には、四十二の誕生日を一月に迎えた高見の体はいささか応えづらい。「男盛り」と、ただの「盛り」の意味がちがうことを、とうとう納得させられなかった。

高見は、周囲からは、用心深くて頭の切れる男だと思われていた。それは半分以上事実だが、ときおり、そう一年に一度くらい、頭の血管が本当に切れる音が聞こえるようなことがあって、そうなる自分でもまるで信じられない無茶をしでかすのだった。その無茶のひとつが、あの娘とのつきあいだった。

娘とのことは、まわりに知られざるをえなかったが、他の無茶は今のところごく限られた人間にしか知れていない。

業界には、自分に関する評判がひとり歩きするのを好む手合いが多かったが、高見はちがっていた。ひとり歩きしてほしいのは、今定着している「用心深くて頭が切れる」という評判で充分だった。「切れると何をしでかすかわからない」という評判は、「実は頭が悪い」という噂に変化しかねず、そうなたら、今のような状況では「水ぎわの犬を打って」ひと儲けしようとかくらむ、もっと頭の悪い連中の相手をしなければならなくなる。

それだけご免だった。高見の辞書では、「頭が悪い」というのは、「忍耐がない」と同義語で、そういう連中ほど始末に困る手合いはいない。

寝返りを打ったとたん、急に目が覚めた。腕時計をはめて寝る癖がついていて、のぞくと、ダイヤモンドを埋めこんだ八百万の文字盤が現在時刻を三時半だと教えた。

少しむし暑い夜で、高見は境内に面した窓を細め

に開けて眠っていた。

なぜ自分が目ざめたのか、ぼんやりと考えていた。布団をしいただけの六畳間は殺風景で、このところ部屋にいればいつも読んでいる中国古代史の本が十数冊と寝酒にしたカミユのボトルにグラスがあるきりだ。

そうか、虫の音だ。

気づいたとき、ミシツという、かすかな軋みが玄関の通路から聞こえた。

ドアに吊るしておいたカウベルも鳴らなかったとは奇妙な話だ、つづいて高見は思った。昔の喫茶店でよく見かけるようなカウベルを、高見は眠るときにドアの内側に吊るしている。

このマンションを選んだ、よつつめの理由が、内装は新しいものの築十五年、というところにあった。玄関とリビングを結ぶ通路の下に根太が傷んでいて、少しでも重みがかかると、さっき聞こえたような軋みがたつのだ。

虫の音がまず止んだ。それが高見の目をさませせたのだ。虫は、六畳間のすぐ窓辺でも鳴いていたのだ。

まず心に浮かんだのは、面倒なことになった、という思いだった。眠けが勝っていたために、まだそのていどのことしか思いつかないのだ。

つづいて思ったのは、何人いるのだろうか、という疑問だった。

ひとりということはない。ひとりだったらお手上げだ。ひとりで乗りこんでくるようななら、まず拳銃をもっていて、使い方に自信のあるようなプロだろう。素手のこちらに勝ち目はない。それに、ひとりなら、目的ははっきりしている。一対一で、「さう」だの「痛めつける」はない。「消す」あるのみだ。

それでも高見は膝にまとわりついていた毛布をそつと外し、中腰の姿勢をとった。首の長いカミユのボトルをつかんだ。キャップがしっかりとしまっていることを手探りで確かめる。いざというときに酒がこぼれて手がすべりましたでは、洒落にならない。リビングルームと六畳間の境いには、襖紙を貼った板戸がある。今はごく細いすき間を残して閉まっている。

湿度が高いこの時期、滑りは決してよくはない。

と思つてゐる間に、その細いすき間から数本の指がのぞいた。

どうやらそれほど慣れた玄人ではない。これから「仕事」をする相手の部屋に忍びこみ、中のようなもうかがわず、一気に寢室の戸を開こうというのだ。となれば、次の行動もパターン化している。

高見は怒った猫のように布団から跳ね起きた。がらつと板戸が開かれ、

「高見い、天誅！」

金切り声の叫びがした。同時に日本刀の抜き身が光ると、布団めがけて黒い影が突進する。

侵入者は二人だった。あとの方の役目は大きめの懐中電灯で「仕事」を照らす仕事だ。

だがおおむね、そういう役回りを果たす側の方があがつていて、失敗する。

だから光が六畳間を裂いたとき、パンチパーマに剃りを入れた若造が、だんびらを誰もいない布団に突っこんでいる間抜けな姿が煌々と照らしだされる結果になった。

高見は隠れていた板戸の陰から一歩踏みだすと、カミユのボトルの底を若造の顔面に叩きこんだ。

ガラスの割れる音、鼻骨の碎ける音が、決して派手ではなく響いた。カミユのボトルは底が厚く、コップが割れるようにはいかなない。

若造は声もたてず転がった。死にはしないだろうが、顔は何十針と縫う羽目になる筈だ。

照明係は、ひつという声をあげた。高見は、若造の手から落ちた日本刀をすくいあげた。白木の柄の安物だ。ポン刀といったところで、一人でも刺せば、刃がこぼれ目釘がゆるむような大量生産品だった。

手をのばし、蛍光灯のヒモを引いた。明りがつき、馬鹿みたいに高見の顔にライトを向けている照明係が目を瞬いた。

照明係は、のびている若造よりは少し年上だった。おおかた、若造をたきつけ、監視する役を上からおせつかったのだらうが、口ばかりで度胸がともなわなかったのだ。紺のダブルに、趣味の悪いピンクのシャツを着ている。ネクタイは、エルメスの時代遅れだ。三十四、五といったところだらう。やけに生っ白いところを見ると、ふだんは女のケツモチでもやっているのかもしれない。

高見の心臓の鼓動も、ようやく落ちつき始めた。

「殺す」とおどされたことは、これまで何十度とあったが、こうして本気で襲われたことは初めてだった。夜中に寝ているところに日本刀もちでやってこられるのは、盛り場で喧嘩をするのとはわけがちがう。

「すわれ」

かすれ声がでた。照明係は、わなわなと唇を震わせながら、ぺたんと尻を落とした。目がきよろきよろと動き、今にも吐きそうなほど激しく喉仏を上下させている。どういいわけをつくろおうと、「殺しに」きて、失敗したことは見えている。だから言葉がでないだろう。

高見は深呼吸した。喉が鳴った。からからに渴いている。

「堪忍してください！」

不意に照明係が正座して、額を床にこすりつけた。「堪忍して下さい、何でもします、何でもいう通りにしますから……」

背中を丸め、念仏を唱えるようにくり返している。

高見はようやく息を整えた。

「誰にいわれてきた」

煙草が猛烈に吸いたかった。が、願をかけた三月、禁煙したのだ。もつとも願がかなっていたら、ここにこうしてはいなかったろう。

「堪忍して下さい」

男はくり返していた。

「できねえよ」

高見はいつて、刃で軽く男の背を叩いた。背広がすぱっと裂ける。男は悲鳴をあげ、子供のよう to 体を縮めた。

「本部」か？「本部」の決定なのか」

十中八、九、その筈はないと思いつながらも訊ねた。もしそうだと答えたら、この男の命をとらなければならぬ。

「ちがいますう。う、うちの……」

いいかけ生唾を呑んだ。

「うちの何だ？」

「う、うちの隊長の……」

それで見当がついた。「隊長」という肩書があるのはひとりだけだ。「愛国決起隊」だろう。馬鹿に二乗がつくといわれた、「本部」傍流の、山谷だ。前々から高見のことを苦々しく思つて、機会があれば

ば潰そうとチャンスをうかがっていたことを知っている。

『関東に武闘派はお呼びじゃない』といつだったか高見がいった言葉を、自分のことだと思ひこんでいるのだ。高見にしてみれば、山谷など「武闘派」のうちにも入らない、目立ちたがりの喧嘩馬鹿だ。

「山谷が、俺を殺れてか。『本部』に迷惑かけたからって、ん？」

「は、はい！」

男は這いつくばった。

それで自分に陽が当たると、山谷なら思ひこみそうだった。高見が現われなくても、山谷が「本部」主流の座につくことはありえなかったのにだ。

馬鹿の上に嫉妬深くてはどうしようもない。

高見はため息をついた。こんなチンピラを使っている阿呆と「同格」だったと思うと、涙がでそうだ。

「山谷、どこにいる」

「堪忍して下さい」

「できねえつってんだろ、馬鹿！」

高見はどなって、男の左耳を切った。男が呻き声をたてた。

「いえば、耳いつこで勘弁してやるよ。いえっ」

「ぶ、分室に」

「分室？ 曙橋の事務所じゃないのか」

「い、いえ。若松町の分室です」

高見は合点した。若松町の分室は、河田町の「本部」に近い。いざとなれば「本部」に逃げこむ気なのだ。この男たちが失敗したとき、逆上した高見がカチこみをかけるのを警戒したにちがいない。

「わかった。お前の名前は？」

「く、国松です。あっちは時田」

「隊員か、両方とも」

「と、時田は、見習いです」

「馬鹿か……」

思わず本音がこぼれた。正式な組員でもないチンピラに日本刀を預けて、殺しを命じたとは。

山谷もこれで終わりだ。

「二人だけできたのか」

「は、はい」

「電話は」

「し、下の車に……」

「終わったらする手筈か」

「はい」

「いくのはお前か」

「はい」

「誰と話つけた」

「よ、よ、四谷署のマル暴と」

「でかの名は？」

「神尾です」

つまり、高見殺しの罪は、この国松が背負って、出頭することになっている、というわけだ。いくらなんでも殺しの実行犯を、見習いがやりましたと自首するわけにはいかない。

「そのでかほどこまで知ってる」

「まだ、まだ、何も。ただ……近いうち、俺、でかいことするからって……」

「なるほど。じゃ今から電話しろ」

「へっ」

国松はのけぞった。

「今から電話して、若い衆に一発、根性入れてやりましといえよ」

「そ、そんな！ できないです」

「できない?！」

「で、できるわけないです。俺、隊長に殺されま
す」

「今ここで殺してやろうか」

首の下に刃をあてがった。国松は失禁した。濃い匂いが鼻を突く。

「しろ」

「は、はい……」

這うようにして国松は電話のところまでいった。四谷署に本当に電話しているかどうか、高見は真剣に見守った。警察署の代表番号は、すべて下四桁が「〇一一〇」である。

でた交換手に、

「あ、あの、刑事課の神尾さんを……」

国松はいった。

「は、はい。四係の……」

受話器をおろし、国松は途方に暮れたように高見を見た。

「あの、自宅だそうです」

「じゃ切れ」

高見はいった。ほっとしたように国松は受話器を置いた。

確認はできた。何かあれば、四谷署の神尾という
でか使える。高見は頭に刻んだ。

引越しのときに残ったガムテープがキッチンに
あった。高見はそれを国松に投げた。

「それで自分の足を縛るんだ」

国松はぼかんとした。

「へ」

「縛れ」

まず足首をぐるぐる巻きにさせ、その上で後ろ手
に手首を縛った。また殺されると思い始めたのか、
縛っている途中で国松はがたがた震え始めた。

何か叫びだしそうな国松の口もテープで塞いだ高
見は、昏倒している時田のようすを見にいった。

ガラスの破片が顔面にくいこみ、血とブランドー
でぐしょぐしょになったチンピラは、それでも浅い
呼吸をくりかえしていた。時田の手足も、高見はテ
ープで縛った。時田は意識を回復し、唸り声をあげ
た。が、それ以上、声がでないようにガムテープを
口にも巻いた。血ですべったが、どうにか固定した。
破片を押しつけられ、呻き声が高まる。

二人を片づけると、高見は着ていたパジャマを脱

いだ。時田の血で染まっている。

ジュラルミンのアタッシェケースを開け、着がえ
のシャツと下着、ネクタイを二組ずつ入れた。ビニ
ール袋に包んだパジャマもしよう。読みかけの本を
一冊、すきまに押しこんで、荷造りは終わりだった。
どうしてももっていかなければならないものはこれ
以上はない。

部屋に備えつけのクローゼットから、いちばん気
に入っているこげ茶のスーツをだして着た。ダイヤ
のカフスでシャツの袖を留め、シルクのタイを締め
る。

でがけに日本刀の柄を雑巾で拭いた。たぶん警察
はからまないが、いきがけの駄賃で銃刀法違反を背
負わされてはかなわない。

ドアのカウベルは、いつの間にかとり外されてい
た。器用な腕を、国松か時田のどちらかがもって
たのだろう。

アタッシェケースを手をマンションをでて、二百
メートルほど歩いたところでタクシートの空車をつか
まえた。

「六本木へやってくれ」

高見はいった。運転手の目には、高見はやくぎだとはうつらなかつたようだ。素面の高見を、

「たいへんですね、こんな時間から仕事ですか」

とねぎらいながら、運んだ。

六本木の交差点を渋谷方向に少し進んだところで高見は車を降りた。

午前五時近くなり、さすがに六本木も人影が少ない。道路の左側には空車のタクシーがべったりと客待ちの列を作っている。地下鉄の駅の入口には始発を待つのか、十五、六にしか見えない、薄ぎたないなりをした小僧どもがたむろしていた。

高見はハンバーガーショップの角を右に折れた。左手に新しく建ったばかりのビルがある。じきに夜が終わるといふのに派手なイルミネーションが点滅していた。金色の光の中に、赤い「CASINO」の文字が浮かびあがっている。磨きこんだ大理石のエントランスホールには、観音開きの巨大なガラス扉があり、タキシードを着こんだ白人と黒人のドアボーイのコンビが立っていた。

高見が大理石の階段をあがっていくと、黒人が扉を開き、深々とおじぎをした。訛りのある言葉で、

ドウモコンバンハ、という。

高見は小さく頷き、二人のあいだをくぐった。エレベータホールの手前にクロークがあった。

「いらっしゃいませ」

そこに白人の娘二人とやはりタキシードを着けた日本人の男がいた。男の方に高見は頷いてみせ、アタッシェケースを受けとろうとした白人女の腕を止めた。

「鴨田はいるか」

「いらっしゃいますが、今ちょっとお客さままで……」

男は困ったようにいった。

「社長の人間か」

「いえ、ちがいます。社長の昔馴染みだそうです」

「わかった。じゃあ四階で暇をつぶしている。用事がすんだら声をかけるように伝えてくれ」

「はい。了解しました」

正面のエレベータに乗りこんだ。ボタンは六階まで並んでいる。高見は「四」と「閉」のボタンを押した。扉が閉まる直前、クロークの男は、

「ごゆっくり」

といって、頭をきげた。

エレベータが上昇を開始すると、高見はすぐに「六」のボタンを押した。

エレベータは途中、どこにも止まらずに四階に到着した。扉が開くやいなや、「閉」のボタンを押した。

四階にはルーレットテーブルが三台おかれている。二台に客がとりついていて、女がそのうち約半分、十二、三人だ。銀座や六本木のホテルは、カジノバーの意外な上客だった。そこいらの遊び人を気どるカタギのサラリーマンなどよりはるかにでかい金を気前よく賭ける。

鴨田にカジノバーを始めると勧めたのは高見だった。そのために、このビルを建てた土地が所有不動産屋の破産で「塩漬け」になっていたのをうまく溶かす方法も考えてやった。

それまでの鴨田は、チンケなスナックとノミ屋の親父でしかなかった。今では「本部」の覚えもめめたい、同期の出世頭だ。「本部」がいくら上納金を釣り上げて、エビス顔で一括払いしている。

六階でエレベータが扉を開くと高見は足を踏みだ

した。

そこはぶあついカーペットをしきつめ、壁に油絵を飾った「応接室」だった。その油絵が泣かせる。十枚いくらで通販屋が売りつけるような安物だ。おおかた額縁の方が高くついているだろう。絵はぎつと十二、三枚ほどあって、中央に黒い皮ばりのソファをすえているので趣味の悪い画廊といったところだ。

見渡したところ、いちばん値が張りそうなのが、いちばん目立たぬところにかけられたリトグラフで、二十万がせいぜいだ。鴨田が出入りの画廊にいくらかふんだくられたかは知らないが、「カタギをいちばん信用するな」という「業界の真理」を忘れてしまったと思えない。

そのソファに、スーツを着たいかつい男が二人すわっていた。見たことのない顔だった。ボディガードだろう。そのスーツといい、ネクタイといい信じられないほどセンスがない。極道だと首から札を下げている方が、まだ正体がばれにくいのではないか。高見が正面の扉に向かおうとすると、ふたりはさつと立ちあがって高見をはさんだ。

「なんや、われ」

握り飯のような頭の形をしたパンチパーマのずんぐりむっくりがしわがれ声でいった。

高見はかすかに顎をひき、

「この社長の兄貴分だ。そっちこそ何者だ」

低い声でいった。

ずんぐりむっくりは目をしばたいた。考えようとしているのだが、その空っぽの頭からは何も言葉がでないようだ。

おそらく最初に発した言葉以外にみつつかよっつしか言葉を知らないのだろう。関西にいるやくぎの半分はそういう連中だと高見は聞いたことがあった。もつとも兵隊にはそれで充分だ。なまじ頭が働く兵隊などろくな役に立たない。

関西がのしたのも道理というわけだ。

もうひとりはまだましな頭をもっていた。

ずんぐりむっくりの袖をひき、

「えらい失礼しました」

と腰をかがめたのだ。

高見は小さく頷いた。

「いや。ご苦労さん」

奥の扉をノックして、押し開いた。

中に、鴨田と、この二人をひき連れてきた男がいた。

「兄貴！」

馬鹿でかいデスクにふんぞりかえっていた鴨田が仰天したように立ちあがった。高見はその表情をじっくりと観察した。驚きが、突然の来訪によるものだけかどうかを見きわめようと考えたのだ。

どうやらそれだけのようだ。

ようやく高見は、デスクと向かいあっておかれたソファにすわる男に目を移した。蛙のようにぶよぶよと太った男だ。小さい三角形をした目に狂暴さと狡猾さが入り混じって浮かんではいる。薄物の派手なシャツに白いスラックスときた。

ひと目見て嫌いになった。笑顔満面で話しておいて、背中を向けたとたん刺すようなタイプの男だ。

「あ、久野さん、紹介します。わたしの兄貴の高見さんです。兄貴、こちら大阪の道頓会の久野さん。先に、箱根で関西とのシンポジウムがあったときに知りあったんです」

久野はあせる鴨田を見て、一発かましてやろうと

決めたようだ。何もいわず横柄な仕草で煙草に火をつけた。どうやらひと目で合わないタイプだと、高見を見たらしい。お互いさまというわけだ。

「関東は、舎弟の部屋やったら、いつでも挨拶なしにどかどかこれるんてつか。よろしいなあ」

煙を吹きあげ、ちらちらと上目づかいで高見をにらんだ。

「そういうわけじゃないんですよ。ちょっと急ぎの理由がありましてね。失礼しました」

高見は下手にでた。鴨田ははらはらしたように二人を見比べた。

「ほう。急ぎの理由。そうですね。それやったらしょうがないですなあ。わしらやったら、客人の前でそんな無躰どじつやったら、えらいしばかれますわ」

喧嘩売ってるのか、こいつ。一瞬、高見の頭にかつと熱い血がこみあげた。だがそれをおさえつけ、笑みを浮かべていった。

「そうですね。西は特に礼儀にはうるさいと聞いてますから」

勝ったと見たか、久野はにたと笑った。

「そうですね。ま、よろしいわ。急ぎの話があるん

やったら、ちっと席、外さしてもらいますわ」

「申しわけありません」

高見は頭を下げた。

「気にせんといて」

鷹揚に久野はいつて、腰をあげた。

「すいません」

鴨田も頭を下げる。

「いやいや。何いうてんねん。わしと鴨田さんの仲やないか。ほな、外の部屋で待つとるさかい、終わったら声かけてや。な」

久野はいかにも大物ぶっていうと、部屋をでていった。

高見は顔をしかめた。

「なんだ、あのでぶは」

「勘弁して下さいよ、兄貴。それでなくともでかいツラされてうんざりしてんですから」

鴨田は泣きそうな顔になった。

「本当に大阪の極道なのか」

「ええ。自分じゃ天王寺会直系の幹部候補生だなんてほざいてますがね。箱根のときはとにかく仲よくやんなけりゃいけないってんで……。まさかあんな